

助動詞「ず」の統語論的考察

吉 永 尚

1. はじめに

現代日本語において、「ず」は主として慣用的表現や中止法などに使われ、打消の助動詞とされているが、統語的な機能を考えると、同じく打消の助動詞「ない」とはかなり異なった性質を持つ。古典語の「ず」系統の打消の助動詞が現在に引き継がれたものであり、文語的表現に多く用いられ、口語的表現に用いられる「ない」とは並行して用いられるが、両者の統語的役割を観察すると、同類の助動詞であるとは言い難い。

本論文は助動詞「ず」の現代語における統語的機能について明確化する事を目的とする。現代日本語において打消の助動詞「ない」は、一般的な統語構造では動詞句の上位、つまり時制句の下に位置すると考えられ、動詞句を支配する否定句 (NegP) の主要部 (Neg) となる要素であると考えられる事ができる。否定のスコープの観察などから、この統語的位置は正しいと思われるが、「ず」については、この位置に生起する否定句主要部であるとは考えにくい。なぜならば、「ず」には「ない」に見られない強い名詞性が観察され、「ず」で終わる句 (以後、「ず」句と略称する) が主語や名詞修飾成分となりうるからである。

これらの文法現象を例文で考察し、今まであまり論じられる事がなかった「ず」の名詞性について論証したいと思う。名詞性の判断基準としては、Predicate Copula (述語コピュラ) や後置詞、格助詞の付加、指示詞の前置を設定する。また、「ない」との相違についても考察し、統語的役割の違いを明らかにしたいと思う。

2. 名詞性についての観察

非慣用的なものと同慣用的なもの、それぞれについて「ず」句を含む例文について名詞性に関与する各種の要素を付加し、その許容度により名詞性を観察することとする。

2.1 非慣用表現における名詞性の観察

まず、日常的に使用される、名詞性を表す成分を付加した慣用表現以外の例文を挙げ、それらの文法性を観察したい。

①珍しくこの週末はどこへも行かずだ。(名詞句に後置される Predicate Copula の「だ」)

②誰にも頼らず誰にも相談せずで今までやって来たが、考え方が変わった。

(名詞句に後置される後置詞の「で」)

③私の話を笑わずに最後まで聞いてくれた。(名詞句に後置される後置詞の「に」)

④吹雪で外へも出られず、連絡もできずの状態が続いた。(名詞句修飾の「の」)

⑤普段から焦らず怒らずを心がけている。(名詞句に後置される格助詞の「を」「が」)

焦らず怒らずがモットーです。

⑥あの病気知らずが何とかで寝込んだらしい。(名詞句を指示する「あの」「この」)

この病気知らずが三日も寝込んだのだから、今年の風邪は恐い。

①では、「ず」句に「だ」という判断詞、すなわち Predicate Copula が付加されているが文法的には問題ないと思われる。非過去の「だ」より「だった」のほうが落着きが更に良くなる。Predicate Copula は一般的に名詞に付加され、「どこへも行かず」は何らかの名詞性を持っていると判断される。

また、「大事なのはここからだ」など、後置詞句にも付加されるが、このような文は焦点化されている事が多く、焦点化された分裂文では、多様な要素に「だ」が付加されるため、名詞文とは区別される。

②では、名詞句に後置される後置詞の「で」が付加されているが、「誰にも頼らず誰にも相談せず」が全体でひとまとまりの名詞句となって「で」が付加されていると思われる。この「で」は「普段着で出かける」「手ぶらで行く」の様な、状態を説明する「で」に近いものであると考える。この例文からも、「ず」は名詞句を形成する何らかの働きがあると判断される。

③では、名詞句に後置される後置詞の「に」が付加されていると考える。これについては、後節で詳しく述べたいと思うが、「傘を持たずに外出する」など、慣用語以外の「ず」では、広汎に用いられる。「ず」に、「他人行儀に」等の付帯状況を表す後置詞の「に」がついて、後置詞句を構成していると考えられる。従って、この例文からも「ず」に何らかの名詞句構成機能がある事が予測される。

④では、名詞修飾句を導く「の」が付加されており、やはり「ず」の名詞性を示している。「の」が付加されるためには、その前の語が「英語の本」の様に名詞句、あるいは名詞性の強い要素である事が前提となる。従って、「外へも出られず、連絡もできず」はひとまとまりの名詞句構造であると判断される。また、後節で述べるように「開かずの扉」など、慣用表現でも「の」が付加されるものがある。

⑤では、名詞句に後置される格助詞「を」「が」が付加されているが、一般的に、格助詞が付加される語には名詞性を持つ事が条件とされる。「本を読む」など目的格の「を」、「太郎が走る」などの主格の「が」は、両者とも名詞句、名詞性の強いもののみ許容される。「*書いたを読む」「*書きますがいい」など、名詞性を持たない要素には許容されない。

「ここからが本題だ」など、後置詞句にも付加されるが、この様な句は、「ここからの内容」などの名詞的成分を「ここから」という後置詞句で表していると思われ、名詞性という点で条件に合致していると考えられる。

⑥では、名詞成分にのみ前置が許容される指示詞が付加されている。慣用句にも多く見られ、「この恥知らず」「あの恩知らず」のように、「ず」句が、それぞれの性癖傾向を持つ人を総称していると考えられ、やはり強い名詞性を表している。また、罵りの表現として「この役立たず！」の様に一語文で現れることもあるが、やはり「あの世間知らずに勤まるだろうか。」の様に格助詞を伴い文の主語や補語となって現れる場合が無標であろう^{注1)}。

また、「*どこへも行かずを」など、①の例文では格助詞が許容されないが、名詞句でも①～⑥ほぼ全ての成分が付加できるものと、「～つもり」など全部は付加できないものがあり、名詞句の中でも格助詞類との共起は一樣ではなく差が見られるので、形式名詞で括られる名詞句において、全ての成分付加が許容されなければ名詞句と認められないというわけではないと思われる。

以上の例文で観察された統語現象から判断して、「ず」が名詞句を構成する形式名詞的な機能を持っていることはほぼ間違っていないと思われる。

以上、慣用表現以外の一般例で名詞性を観察したが、現代語において「ず」は慣用的表現に多く見られる。次に慣用的表現における名詞性を観察したいと思うが、その前に、③における「に」の統語的機能について明らかにしておきたい。

2.2 「に」の範疇をめぐる考察

結論から言えば、例文③の「に」は後置詞であると思われ、この用法は連用修飾句として「表情を変えずにクレームを聞く」「ニコリともせずに返事をする」「油を使わずに焼く」など慣用句以外でも多用されている。

これと同類の「に」は、前述した「他人行儀に挨拶をする」「几帳面に仕事をする」などの付帯説明的な「に」であると判断され、「他人行儀」など性質状態を表す抽象的名詞句に付加され全体として副詞的な後置詞句を構成していると考えられる。同様に③では「ず」によって名詞句としてひとまとまりになったものに、付帯説明の後置詞 P の「に」が付加して全体として後置詞句 PP を形成していると思われる。

これは「ず」によって名詞句 NP が構成されているという本論文の主張より帰結する推論であるが、「に」の範疇が何であるかについてももう少し考える必要があると思われる。

「に」句が連用修飾句として現れる例として、目的句の「～に」がある。

- 1) ゴミを出しに行く。
- 2) 水をやりに行く。

では、いずれも「行く」の目的を表す連用修飾成分として「～に」が選択されている。これらも、動詞連用形に目的を表す「に」が後置され、全体で後置詞句 PP を構成していると判断され

る。動詞連用形の形態と意味、統語位置は複雑に入り組み簡単に結論付けられないが、連用形の持つ性質の一つに「名詞性」がある。「釣りが趣味だ」「造りが丈夫だ」のように連用形単独で名詞となっているものや、「モグラ叩き」「大根おろし」「新人潰し」「城巡り」のように複合語として名詞の後に取り込まれているものも多い。上の例文を複合語化すると、

- 1) ゴミを出しに行く。は、
- 1)' 「ゴミ出し」に行く。
- 2) 水をやりに行く。は、
- 2)' 「水やり」に行く。

のように、意味をほぼ変えずに置き換える事ができる。

1)' 2)' では、複合語は全体として複合名詞 NP となっているので「に」は後置詞 P であると考えられ、もとの文 1) 2) においても意味的構造的に大きな違いがあるとは考えられない。

仮に、「に」が補文構造 CP を形成する補文標識 C であるとし、その補部を考えると 1) では「ゴミを出し」2) では「水をやり」が、構造上、時制句 TP でなければならないが、このような文環境の動詞連用形はテンス T を持たないとするのが一般的である。

連用修飾句を構成する「に」の多くは後置詞であると思われ、例文③の「に」もやはり後置詞であると判断される。従って、逆算的に前接の「ず」句は名詞句（名詞的成分）であると考えられる。

同様に、「に」が補文構造 CP を形成する補文標識 C であると仮定し、その補部を考えると、「ず」句は時制句 TP でなければならないが、例えば「油を使わずに焼く」の場合、「油を使わず」が時制句 TP であるとは考え難い。

樹形図を用いて、「ゴミを出しに行く」の「に」を後置詞とした場合、補文標識と考えた場合について、それぞれ補足説明すると、図 1、2 の様になるであろう。また、前述の「ず」句を含

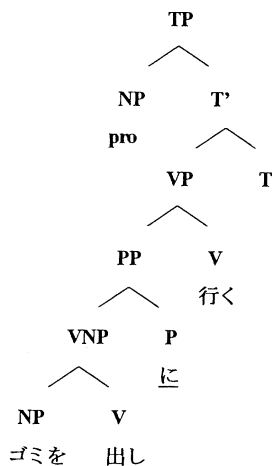


図 1 「に」を後置詞 P とした場合の「ゴミを出しに行く」の統語構造

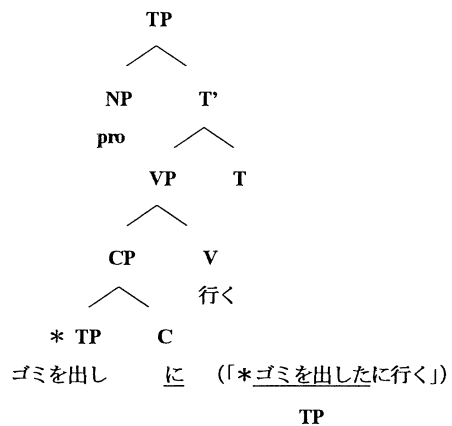


図 2 「に」を補文標識 C とした場合の「ゴミを出しに行く」の統語構造

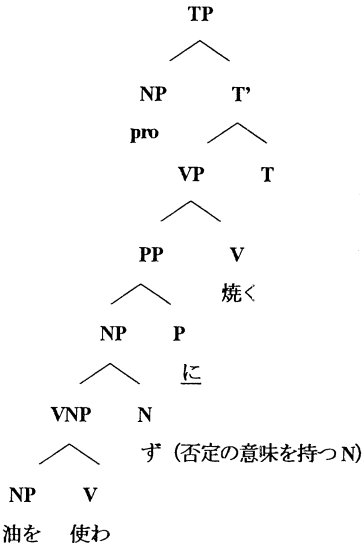


図3 「に」を後置詞 P とした場合の「油を使わずに焼く」の統語構造
(便宜的に「油を使わず」を XP としている。)

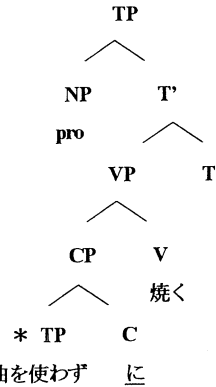


図4 「に」を補文標識 C とした場合の「油を使わずに焼く」の統語構造

む例文「油を使わずに焼く」についても、それぞれ「に」を後置詞とした場合、補文標識と考えた場合について、それぞれ補足説明すると、図3、4の様になるであろう。

「ゴミを出し」「油を使わず」に T が無い事は構造的に判断される。動詞連用形はさまざまな環境に出現するが、一般的に T が無い位置にある。言い換えると T が無い位置に多く連用形が選択される。

補文標識 C の「と」は補文節の主要部となり、補部に TP を取るが、間接話法を導く「と」節で文法性を見ると、この様な環境では動詞連用形は選択されない。

- 3) (彼が) ゴミを出すと 思った。・・・「出す」に T がある。
- 4)* (彼が) ゴミを出しと 思った。・・・「出し」に T が無い。

また、「ず」句においても同様に「と」節で文法性を見ると、

- 5)* (彼が) 油を使わずと 思った。

の様非文となる。興味深いことに「ない」で置き換えると、許容される。

- 6) (彼が) 油を使わないと 思った。

打消の助動詞「ない」との相違については節を改めて論じたいと思う。

この節の結論として、「ゴミを出しに」の「に」は後置詞であると考えた方が合理的であると判断する。従って、「油を使わずに」も補文節 CP ではなく後置詞句 PP であると考えられるのである。

2.3 慣用表現における名詞性の観察

次に、「ず」句を含む慣用表現についても同様に名詞性を観察したい。

2.1で名詞性の判断基準として①～⑥の名詞的成分を挙げたが、これらのうち、どれが許容されるかによって、慣用表現を四つに分類する。〈 〉内の番号は、各グループで許容される当該例文中の名詞的要素を表している。また、慣用表現の「ず」句を太字で表記する。

a) 〈①④を許容するもの〉

7) 是非行ってみなさい、百聞は一見に如かずだよ。

8) 今回の事件は典型的な悪銭身につかずのパターンだ。

このグループは、格言やことわざになっているものが多く、名詞性というよりは、ひとかたまり性、ワンフレーズ性が強いといった方がよいかもしいない。冗談以外では語順を入れ替えたり、他の語で置き換えたりされることはできない。このようなものの類例として、以下の「ず」句が挙げられるであろう。

「手間いらず、あぶはちとらず、井の中の蛙大海を知らず、魚の目に水見えず、季下に冠を正さず、君子危うきに近寄らず、後悔先に立たず、弘法は筆を選ばず、立つ鳥跡を濁さず、働かざる者食うべからず、覆水盆に返らず、論語読みの論語知らず、親の心子知らず、虎穴に入らずんば虎児を得ず、情けは人の為ならず、笛吹けど踊らず、ともに天をいただくず、二兎を追う者は一兎をも得ず」

古典語では、文末の「ず」は打消の言い切る形、すなわち終止形として機能していたと思われるが、室町時代末になると一般に活用語の連体形が終止形を冒すという趨勢に応じて話しことばでは専ら連体形「ぬ」が終止形的位置を占める様になったと言われ、現代語では完全に形骸化していることがわかる。

また、古典語では、自動詞の場合 Agent 主語以外の主語は無助詞か「の」でマークされたという。「井の中の蛙大海を知らず」「君子危うきに近寄らず」「覆水盆に返らず」「論語よみの論語知らず」など、主語にはいずれもガ格がなく古典語の統語的特徴を残したまま、ひとまとまりになっている。

同じく①④を許容し、これらとは少し異なると思われるグループに、次の様な形容詞対比表現がある。

9) そういう恐れはなきにしもあらずだ。

10) 今は暑からず寒からずのベストシーズンだ。

このグループは対比的なものを挙げ、そのどちらでもない中立的状態である事を表す「ず」句であり、次のようなものが類例として挙げられる。

「なきにしもあらず、暑からず寒からず、大きすぎず小さすぎず、高からず低からず、太からず細からず」

b) 〈①②④⑤を許容するもの〉

11) 部下を使う極意は生かさず殺さずだそうだ。

- 12) あの二人は全く見ず知らずだったそうだ。
- 13) 今日は仕事を立て込んで飲まず食わずで働いている。
- 14) その大詩人は左遷され、鳴かず飛ばずの人生を送ったという。
- 15) 親子の関係は付かず離れずを心がけるとよい。
- 16) 戦後しばらくは食うや食わずが続いたという。

このグループは対比・類似的な「ず」句からなるが、名詞性を示す成分を最も多く許容し、名詞性が強く、また、後述の d) 以外では格助詞を許容する唯一のグループであり、語彙化がかなり進んでいると思われる。上例で挙げたものが代表的なものであり、a) と比べて類例は少ない。

c) 〈③のみ許容するもの〉

- 17) 彼はずっとわき目も振らずに働いてきたからこそ成功したのです。

このグループは動詞や文を修飾する副詞的な「ず」句からなるが、「に」が省略されることも多い。このようなものの類例として、以下の「ず」句が挙げられるであろう。

「糸乱れず、糸まとわず、間髪を入れず、昼夜をおかず、昼夜を分かつず、手もぬらさず、時を移さず、取る物も取りあえず、肌身はなさず、わき目も振らず、慌てず騒がず、一つ残らず」

d) 〈①④⑤⑥を許容するもの〉

- 18) あんなところに一人で行くんて、本当に怖いもの知らずだ。
- 19) 彼はまだ、世間知らずのこひに過ぎない。
- 20) 本当に最近は礼儀知らずが多くて困る。
- 21) あのわけ分からずが、またトラブルを起こしたらしい。
- 22) この恥知らず！

このグループは名詞成分にのみ前置が許容される指示詞が付加され、前述の様に「ず」句が、そのような性癖傾向を持つ人を総称していると考えられる。強い名詞性を持ち、格助詞、「の」、指示詞などほぼ名詞と同様の成分付加を許容する。このようなものの類例として、以下の「ず」句が挙げられるであろう。

「恩知らず、情け知らず、恐れ知らず、疲れ知らず、役立たず、物言わず」

4つのグループをまとめると、a) は格言・ことわざがワンフリーズ化し、b) は最も語彙化が進み名詞句としての機能が強く、c) は副詞化が進み、d) は「ず」句で表される特徴を持つ人の総称としてほぼ名詞化していると思われる。

以上、慣用表現において名詞性を観察したが、やはり助動詞としての機能は形骸化し、名詞性が強くなっていると判断され、「ず」句が何らかの名詞性を持つ事を傍証するものであると思われる。

従って「ず」が名詞句を構成する形式名詞的な性質を持つ可能性は高いと思われる。

2.4 その他の慣用的用法について

前節で挙げた慣用表現の他に、固定化、イディオム化が進んでいる「ず」句があり、これらについても少し観察することとしたい。

「寝ずの番、開かずの扉（間・踏切）、食わず嫌い、負けず嫌い、わからずじまい、言わずじまい、わからず屋、減らず口」などは、固定化、イディオム化しており、他の語句と置き換えられて用いられることは少ない。

また、「相変わらず、しらずしらず、絶えず、遠からず、とりあえず、いざ知らず、ご多分にもれず」など副詞化がかなり進んでいるものも見られる。前節の c) も副詞化が進んでいるが、後置詞の「に」を付加できる点で、名詞性を残していると思われ、「相変わらず」などとは区別される。

更に、「猫いらず、医者いらず、親知らず、土踏まず」などの完全な名詞もあり、「ず」句の用法は、打消の助動詞の範疇を越えるものが多い事が観察される。

これらの一連の慣用語句は、「ず」句は本来的に名詞性が強いという事と無関係ではないと思われる。従って、本論文の主張を妨げるものではないという事を確認したい。

3. 「ず」の中止法について

第2節で述べた様に、現代語の「ず」句は、名詞述語や主語・目的語などの名詞句成分となるもの、「～ずに～」の様に主文の付帯説明に用いられるもの、「～ずで～」の様に状態を説明するものなどが観察された。

これらは全て「ず」句の名詞性を示す用法であったが、他に多用される用法として、中止法的に「～ず、～」の様に使用される用法がある。この用法は、名詞性を示す他の用法とは働きが少し異なっている様に思われ、次に、この用法についても考えたいと思う。

現代語では言い切りの否定文として「ず」の終止形は現れず、また、未然形が使用されることもなくなっており、中止法での「ず」は当然連用形であると看做される。また、2.1で述べた名詞的用法においても「ず」は全て連用形であるとみなされ、2.3で述べた慣用表現においても a) の格言タイプを除き「ず」は全て連用形であろう。連用形の持つ名詞性とも響き合うと思わ

〈付帯〉 眼を閉じて <u>音楽を聴く</u> 。	手を使わ <u>ず</u> に冷蔵庫のドアを閉める。
〈継起〉 顔を洗って <u>お茶を飲む</u> 。	ドアを閉め <u>ず</u> に出て行った。
〈因果〉 自分の携帯のアドレスをど忘れして <u>困った</u> 。	自分の携帯のアドレスを思い出 <u>せず</u> に困った。
〈並列〉 太郎は英語ができて <u>花子は数学ができる</u> 。	太郎は英語ができ <u>ず</u> 花子は数学が苦手だ。 (*～ずに)

れる。

中止法的に「～ず、～」の様に使用される用法では並列的な文が多いが、動詞連用形中止法、テ形接続と類似していると思われるので、両者を比較対照したいと思う（前頁の表を参照）。

テ形接続の〈付帯〉〈継起〉〈因果〉用法では、否定文にした場合、③で述べた「～ずに」の用法を当てはめる事ができると思われる。しかし、〈並列〉用法では、「～ずに」を用いる事ができない。

一般的にテ形接続の並列用法は、等位構造を取るとされ、付帯状況を説明する、または主節に付加され補足説明するといった他の用法と比べて独立性が高いとされている^{注2)}。

〈付帯〉用法の「～ずに」は前述のように名詞的成分「ず」句に後置詞「に」が付加したものと考えられ、付帯説明成分であると思われ、また、〈継起〉〈因果〉用法の「～ずに」も、主節に付加された補足説明成分であると思われる。〈並列〉用法では、「～ずに」が許容されず、「ず」が独立して用いられる。

いずれも「ず」の連用形であるにも関わらず、「ず」が独立して用いられる場合だけ等位構造を構築するという現象は、一見、矛盾していると思われるが、この点について考えたいと思う。

動詞連用形中止法はテ形接続と同様、並列文で多用されるが、上の〈並列〉用法のテ形接続の例文を、

23) 太郎は英語ができ、花子は数学ができる。

の様に動詞連用形中止法の文に書き換える事ができる。

動詞連用形は2.2で述べた様に「ゴミ出し」など複合名詞の名詞的成分になったり、「釣り」の様に連用形それ自体が名詞化したりする性質を持つ^{注3)}。しかし、23)の様に、等位構造を導く性質も併せ持っている。

「ず」の連用形においても、これと同様の性質があると考えられ、助動詞としての機能は形骸化し名詞性は強くなっているが、助動詞連用形として中止法を導く機能が温存されていると考えられる。

また、内容の独立性、非従属性は確かに特徴として挙げられるが、並列文にはT要素が必ずしも必要ではない。

24) 女は愛嬌、男は度胸。

の様に、並列性に支えられた名詞文も可能である。

従って「ず」が名詞句を構成する形式名詞的な性質を持つという可能性を否定する事はないと思われる。また、「ず」句のうち、「～ずで」の「で」については2で述べたが、

25) 出席もせず試験も受けずで救いようがない。

などの「で」は①の文末の「だ」のような述語コピュラ成分が連用形「で」に変化した因果関係のテ形接続の一種と考えられる。従って②で述べた後置詞の「で」とは区別されるものであろう。

以上の考察をまとめ、「ず」句の用法を大きく分けると次の三類になるであろう。

- i) NP (人) この～、あの～「恩知らず」「恥知らず」
- ii) NP (助詞類付加) ～だ、～で、～に、～が、～を「付かず離れず」
- iii) XP (中止法) ～ず～

現在の時点では、中止法の「ず」句も名詞句であるとしてよいかどうかは不分明であり、今後の課題としたい。

4. 助動詞「ない」との相違

現代語において「ず」句は、慣用句や名詞句として名詞的に使用される場合以外では、殆どが中止法で「～ず～」の様に使用されるか、「～ずに」の様に主文の補足説明をするのに使用される。現代語では言い切りの否定文として「ず」の終止形はあり得ない。

先行研究を総合すると、「ない」は一説では上代東国方言の「なふ」が「ない」につながるというが、室町時代末期には西国の否定終止「ぬ」に対して東国方言には「ない」があったと記録に残っている。その変化過程は明らかではないが、「ない」は徐々に流布し明治時代以来、関西系の「ぬ」を駆逐しいつそう発達してきたと言われる。

一方「ず」は上古の「なにぬね」「ずずずね」「ざらざりざる」など3系列が統一され現代の「ずずずぬね」になったとされ、否定性の強いナ系列と名詞性の強いズ系列、形容詞性の強いザリ系列などそれぞれの名残があると言われる。また、他の助動詞と比べて、その特殊性については早くから指摘されており、鈴木（1987）では「ず」の活用は動詞形容詞いずれの型にも当てはまらず、活用しない「てにをは」として別扱いするという説も古くからあると述べている。西尾（1972）では「ず」を含んだ句が名詞として固まりやすいという事は陳述的面より「ことがらの面」を強く持っていることと関係があるとしており、この指摘は本論文の主旨と整合性があると思われる。

これらの本来的な性質特徴から考えても、現代語の「ず」は「ない」のような否定句 NegP の主要部となる機能を殆ど失い、否定名詞 NP を構成する形式名詞的機能が強くなっていると判断される。統語範疇としては、間接疑問文の「か」のような NP としてのまとまりを作る名詞成分であると判断される^{注4}。

前述の様に、「と」節での「ず」句の文法性を見ると、

26)* (彼が) 油を使わずと 思った。

の様に非文となり、「ない」で置き換えると次の様に許容される。

27) (彼が) 油を使わないと 思った。

この現象には下線部が TP 構造を取るか取らないかの違いが明確に表れている。「ない」は言い切りの形の否定文を構築するが、「ず」にはそのような機能が最早ないのである。

樹形図を用いて「ず」句の構造を表すと、次のようになるであろう。(図6では、名詞と同様の機能を持つ「ず」句の構造も併せて示している。)

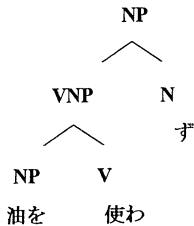


図5 「油を使わず」の構造

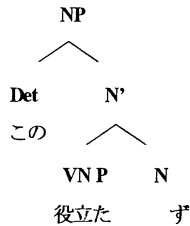


図6 「この役立たず」の構造

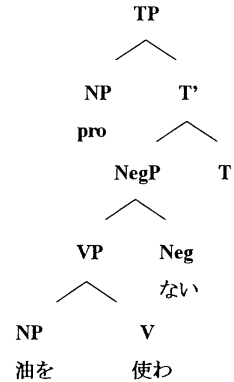


図7 27)の「油を使わない」の部分の構造

いずれも「ず」はNであるとしたい。また、「ない」の統語位置は図7の様であろう。

「ない」はVPの上位にある否定句の主要部であり、否定句はTの補部となる。従って「ず」句のような名詞性は見られず、「ず」では許容される、「今日はどこへも行かずだ」「油を使わずに焼く」などの文も、「*今日はどこへも行かないだ」「*油を使わないに焼く」の様に許容されないのである。

5. おわりに

以上の考察の結論として、現代語の「ず」は「ない」のような否定句 NegP の主要部となる機能を殆ど失い、否定名詞 NP を構成する形式名詞的機能が強くなっている事を提唱したいと思う。統語的範疇としては、間接疑問文の「か」のような NP としてのまとまりを作る成分であると判断される。「ず」句は現代語では慣用表現に多く用いられ文語的印象が強く、口語的な「ない」の文語表現的な類義語とされる向きもあるが、「ない」とは統語的、形態的に全く違う次元の範疇である事を強調したいと思う。

しかし、中止法の「ず」句も名詞句であるとしてよいかどうかは不明であり、今後の課題としたい。連体形「ぬ」など「ず」以外の形態の用法研究についても今後の課題として、研究を続けていきたいと思う。

注

注1) 内堀 (2007) では文末の「こと」を補文標識 C と看做す理由について、「NP そのものが主文を構成することはできない。」と Watanabe, Akira (1996) *Nominative-genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective* の議論を論拠として挙げている。

注2) テ形接続の各用法の従属度、独立度については、吉永 (2008) 第五章を参照されたい。また、三原 (2009) では、テ形接続のうち継起用法と因果用法を継起的なものとしてひとつにまとめ、等位的な並列用法以外を VP 付加または TP 付加構造であるとしている。

注3) 田川 (2008) では分散形態論の立場で動詞連用形に関して連用形自体が名詞化の機能を持つわけで

はなく、連用形の現れる多様な環境のうち、いわゆる助動詞やある接続形式に前接する形態として現れる時それらが取る補文内に TP レベルの投射は現れないとしている。

注4) 「間接疑問文の「か」のような NP としてのまとまりを作る名詞成分」については三原 (2009) を参考にした。

参考文献

- 青柳宏 (2006) 『日本語の助詞と機能範疇』 ひつじ書房
- 庵功雄 (2000) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
- 内堀朝子 (2007) 「モダリティ要素による認可の (非) 不透明領域-「こと」「よう (に (と))」が導く命令・祈願表現をめぐって」長谷川信子編『日本語の主文現象：統語構造とモダリティ』 ひつじ書房
- 鈴木一彦 (1987) 「ず-打消」『古典を読むための助動詞と助詞の手帖』 学燈社
- 田川拓海 (2008) 「統語構造と活用形の非一対一対応：連用形、不定形、終止形」日本語文法学会第9回大会発表予稿集
- 西尾寅弥 (1972) 「打消の助動詞」鈴木一彦、林巨樹編集『品詞別日本文法講座7』明治書院
- 林巨樹 (1969) 「打消の助動詞ず-打消」松村明編『古典語現代語助詞助動詞詳説』学燈社
- 三原健一 (1994) 『日本語の統語構造』松柏社
- 三原健一・平岩健 (2006) 『新日本語の統語構造』松柏社
- 三原健一 (2009) 「テ形節の統語構造」大阪大学大学院授業資料
- 森田良行 (1984) 『基礎日本語3』角川書店
- 吉永尚 (2008) 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書院
- 吉永尚 (2009 a) 「テ形接続における統語的分析-俳句を例として-」『園田学園女子大学論文集』第43号
- 吉永尚 (2009 b) 「いわゆる打消の助動詞「ず」についての統語的分析」日本言語学会第139回大会発表予稿集
- Watanabe, Akira (1996) 'Nominative-genitive Conversion and Agreement in Japanese: A Cross-Linguistic Perspective' *Journal of East Asian Linguistics* 5: 4

[よしなが なお 日本語教育学・言語学]